

本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2004年8月15日 第8号
[特別編集号2]

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832
E-mail:yoshizumi@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性に腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

ゲスト巻頭文

人を排除する言葉、繋ぐ言葉

「人文」はhumanityという言葉と深い繋がりがある。その人文—humanityの矮小化が、今、様々な領域で公然となされている。今春刊行の『平和・人権・NGO』（新評論）の執筆者の一人で、長くNGO（非政府組織）関連の仕事に携わってこられた生江明氏に、この問題の射程から、我々の内側に巣食う言葉の陥穽とそれに気づくことの重要性について、自らの体験を基に語って頂いた。



なまえ あきら
日本福祉大学福祉経営学部教員、コミュニケーション論、広くODA、NGOの開発評価に携わる。

独り合点のラベル貼り——その貧しさ 私たちは他者に名前を付けることがある。あいつは敵だ！ 貧しい人間だ！ などである。そして、大概の場合、それらの呼び名は、対象者がそうであることを前提に、こちら側が次に行くことを正当化する口実の言葉となる。敵だから、貧しいから、そうしたのだ、と。

「いつから私はあなたの敵になったのか?」、そう相手から問われることがなければ、いつまでも敵として憎み続ける。そうする間に、まるで相手が今にも襲い掛かってくるような強迫観念を抱き始める。「なんてったって相手は敵なのだから!」

あるいは、貧しいのだから絶対に助けを必要としている筈だ、と信じ続ける。そうする間に、他者の助けを必要とするのは自立していない証拠だ、と思い始める。「なんてったって、あの人たちは貧しいのだから!」

だが、よく考えてみよう。そうした名付けは誰が行ったものであったかを。「あなたは私の敵ですか?」「あなたは、私の助けを必要としている貧しい人ですか?」当事者に問わずに、相手を決め付ける言葉は暴力である。

助ける対象は貧しい人々か? 私は20年程前、海外で援助協力活動を行っている或るNGO（非政府組織）が開催したバザーに、手伝いとして駆り出されたことがある。現地の村の人々の作った手工芸品を輸入し、販売するという事業である。その会場で私が仰天したのは、売り手を務めるその団体のリーダーたちが口々に枕詞に使う次のような掛け声だった。「世界で一番貧しい国の、貧しい農村の、貧しい女性たちが作ったものです。買ってくださーい!」

その売り口上を、もし、作った本人たちが聞いたなら、どのように思うだろう。そのわずか数週間前に訪ねたバングラデシュの農村、そこで出会った製作者の女性たちの顔は皆、誇らしげだった。しかし、それが自分たちの貧しさで売られていると知ったなら…「もう売らなくていいから、その品物を返して!」と静かにその手を差し出すに違いない。なんてことだ!

援助する側の貧しさ このNGOにとって、手工芸品の買付け・輸入・販売は、現金収入こそ女性たちの「自立」を支援するという一見してわかりやすいものだった。しかし、一時的にどれほど現金収入があったとしても、貧困の構造は変わらない。また、「ベンガルの村の品物は日本市場で売れる筈がないので、私たちが買い取って売ってあげている」とい

う親切で傲慢な思い込みは、ベンガル・キルト刺繍=ノクシカタの伝統を持つこの地域の人々のそもそもの力に気づく視点を欠いていた。それ故、彼らの「善意」は、日本の手芸雑誌の切抜きコピーや、アメリカン・パッチワークを教えたがる安易な行動に向かった。「貧困とは現金収入の不足である」、このような定義が、工賃という現金収入の配給事業を効率的な貧困解決策と思い込ませた。「なんてったってこの人たちは貧しいのだから!」この言葉が、「収入配給事業に依存する貧しい人々」を実際に作ってしまったにもかかわらず…。



みんなて刺せば楽しい仕事。ノクシカタを披露。

こらえ性のない怠惰な言葉 言葉が、人を繋ぐだけでなく、人を排除するものとなるとき、言葉はぞんざいになり、決め付けの言葉となる。そのとき人間は言葉を必要としなくなる。しかし、独り合点の怠惰な土台の上に、いかなる精緻な理屈をそびえさせても、所詮それは醜いものである。ヒューマンとは、敵味方の区別なく、人間それ自体を尊重する概念装置であり、人々を分断する分類を拒む言葉である。そして決め付けの対極にあつて、人がヒューマンであることを明かす学びこそ、「人文」(humanity)である。そこに希望を託そう。その土壌なしに希望の花は咲かないのだから。
(なまえ・あきら)

2004年5月29日、生江明氏を囲み、第23回例会が早大人総研分室で行われた。生江氏の基調報告では、NGO活動と関わりを持つに至った経緯をはじめ、体験や経験の蓄積に裏打ちされた豊富なエピソードが語られた。議論は、エンパワーメントの定義を軸に、今日のNGO観に再考を促す展開となった。参加者は桑田禮彰、土屋進、白石嘉治、出口雅敏。以下は、各人の発言要旨である。(編集/出口)

□甲良町の取り組みとエンパワーメント

生江 いま、滋賀県甲良町(こうらちょう)で行われているプロジェクトに参加しています。それは、海外の人たち(今回はタイ)にも開かれた、地方自治体の政策形成能力向上のための研修です。甲良町は、住民主導の地域社会形成の良き範例となっています。たとえば甲良町では、多数決原理を重視しない。こう言う誤解を招くかもしれませんが、つまり、多数決原理を統治のための方便に使わない、ということです。甲良町では、みな一人一人の意見が異なることを前提に、意見が一致するまで議論を尽くし合意形成をはかる「全員一致原則」を掲げてきました。効率という点では非常に悪い。しかしそこには、一人一人の「違い」を出発点とし、「違うからこそ排除しない」という、ラディカルな地域社会理解の共有が発見できると思います。

この点では、「パワーアップ」と「エンパワーメント」の違いについて触れなければなりません。これは、「力がある」とは、いったいどのような状況を意味するのかに関わります。ふつう、パワーアップとは、欠けている部分を補うこと、残存能力をチューンナップすることを指します。これに対し、人間の潜在的

な力を掘り起こし、これを育てようとするのがエンパワーメントです。それは当事者にパワーをつけるのではなく、むしろその人を取り囲む周囲の人々の側に「発見する力」を促してゆくことです。



滋賀県甲良町 この町には13の集落があり、それぞれに全員一致の原則で運営される組合会、そして集落総会がある。その一つ、北発集落では、江戸時代からのお堂や水路の保全も各世帯の合意に基づく分担金によって改修・維持されている。ここには、非排除の原則によって運営されている地域社会がある。

□慈善イメージの転換

出口 「援助する側—される側」という関係は流動的で、自分はどちらの側だ、と固定されるものではありません。また、個別具体的な場面では、パワーアップ型援助もエンパワーメント型援助も共に必要とされる場合もある。ですから、まずは相互の「側」の関係性の核となるものを我々は見定めるべきです。

一つのヒントは、従来の慈善イメージの検討です。なぜならそこには、生江氏が言うように(P.1参照)、「慈善を施す能動的主体」と「施しを受ける受動的主体」という分割、あるいは「自律的存在としての我々」と「他律的存在としての彼ら」、という固定化が垣間見えるからです。では、彼らの自律性を想定し

た慈善的行為とはいかなるものなのか。

大川正彦の紹介するJ.ウォールドロン²の二論文、「福祉と慈善のイメージ」と「ホームレスであることと自由の問題」では、慈善イメージの転換の必要性だけでなく、「基礎的ニーズの充足と深くつながっている自由」の発見が喚起されています(大川正彦『正義』岩波書店)。すなわち、どのような物質的欠乏に置かれた人間であっても、そうした物質的欠乏状態の中で、必死に求めている自由がある。この観点に立てば、慈善的行為もそれゆえ、「能動的介入モデル」ではなく、援助される側の自助的生存活動を見守る、言わば「受動的差し控えモデル」によって展開されることが大事となるはず。慈善とは、私が所有するものを彼がうまく利用することを認めることです。そして同時に、必要なときには、私も彼に頼れること、そうした相補的な社会関係を育てる行為なのではないでしょうか。

□文化的凄さと社会的凄さ

土屋 文化的現実と社会的現実を切り離して考えることはできないでしょう。しかし第三世界の状況に触れる場合には、一方で伝統に培われた文化的凄さのみが語られ、もう一方では正反対に社会的な悲惨=凄さのみが語られるといったケースが数多く見られます。それは、文化的現実の背後にある社会的現実という文脈を切断したまま、単に、私たちの文化的常識と彼らの文化的常識との乖離性といった基準だけで、異文化が測定され、消費されてきたということです。これでは異文化やその社会の持つ本来の力を見失うことになり、もし他者に、文化的凄さというもの

情報化社会における当事者性と共同性

土屋 進(中央大学他、教員/現代思想)

生活空間が拡大するにつれ、当事者性を構成する「場」は大きな変化を遂げてきた。じっさいヨーロッパで19世紀末に急速に進んだ都市化という空間の拡大によって、共同社会は徐々に後退し利益社会が発達するようになると、「等価交換」を基軸として一人の人間がまるごと相対しあう「当事者の場」は後退し、個人の利害の一部のみを当事者として共有する複数の場が網目のように広がっていった。そして情報化社会が新しい「場」を作り上げると、都市化とともに生まれた当事者の非対称性は、さらに新しい形で押し広げられていった。この新しい「場」は、スイッチを入れれば生まれ、切れれば消えてしまう。「私」は漫画を読みながらメディアが報道する悲惨な事件を眺めることができるのだ。

こういった当事者の物理空間上での非対称性は、実は当事者性の枠組みではあっても本質的ではないことを、私たちは共同性の一番古い起源の中に再発見するだろう。私たちは「死」を所有することはできない。「死」が回収されるのは常に他者によってだ。「私という生」を超えたものを共有しあう共同性の原点、それは、全くの他者は私たちであることを目覚めさせる。そしてこの共同性に命を吹き込むのは、「時」と「行為」の共有である。

飢餓の言葉

蔵持不三也(早稲田大学教員/歴史人類学)

「まるく開けた唇の奥には、声にならない飢えがつかねにある」。誰の詩句かは失念したが、60年代後半、世界はあるひとつの言葉に震撼した。そう、サルトルのあの「飢えたる子供にとって、文学に何が出来るか」という言葉である。たとえ言葉がデイスコミュニケーションの道具だとしても、このあまりにも如実にすぎる言葉を前にして、多くの文学エリートたちは自らの言葉を喪った、あるいは無視した。「飢餓の詩人」黒田喜夫ですら、《飢えの盲動》を喚起できると呻吟するほかなかった。だが、面妖なことに、そこでは現に《ある飢餓》だけが語られ、政治の収奪メカニズムのなかで《つくり出される飢餓》については、なぜかほとんど言及がなかった。もとより《ある飢餓》において、一切れのパンは無数の言葉よりはるかに重い。だが、一国全体がたとえどれほどの飢餓状態にあっても、そこにはつねにぬくぬくと安寧を享受する者たちがいるという、歴史の真実を想起せよ、飢えたる唇の奥りにある、もうひとつの声にならない言葉の意味と痛みとを満たさない限り、つくられた飢えの言葉を結果的に是認することになるのではないか。《援助》という名の言葉が、本来的に内包する陥穽に陥るのではないか。そのことを私は危惧する。

の解体と「発見する力」の奪還へ向けて

見出すならば、その背後にある社会的凄さに繋げてみるべきです。そうするだけで、開発思想が覆い隠してきた「社会の力」を再発見できるはずはです。

〇ルールよりもマナー

白石 最近、禁煙運動や街頭美化運動の一環で、「マナーからルールへ」という看板を街中で見かけることが多くなりました。問題は、ここに如実に示されている今日的な風潮において、関係的なあり方よりも実体的なあり方が人々のあいだに広められ、それを通じた管理が目指されている点です。

マナーである限りは、主体的な判断ということが問われます。その場その場の状況という、個別具体的な関係のなかで自らの行動の判断を下していく。そうすることによって、同時に、自分と周囲の状況との関係について、よりきめ細かな洞察力を育むことができます。マナーをルール化してゆくという方向ではなくて、むしろ逆に、ルールで定められる範囲を狭めて、マナーの領域を拡大する。このことなしには社会的なものはありません。

〇社会の力量とは

桑田 かつて私は、阪神・淡路大震災後の現場を訪れた際に見聞したことから、以下のような議論を提起しました(『震災の思想』藤原書店)。

震災で家を失った人たちの居住形式には、体育館型とテント村型の二つのタイプがありました。体育館型は、行政主導でリーダーというものが生まれにくい、行動が起こせないし、またプライバシーというものもない。一方、テント村型では、自然とリーダーが生ま

れ、行政なんて待ってられないから、例えば、体育館の住民のように仮設トイレが設置されるのをただ待っているのではなく、そこから辺に穴を掘って使う。プライバシーも、「ふすまの思想」が生きる、と言うのでしょうか、テント一枚で守られるし、それよりもなによりも、被災者たちはまるで、キャンプファイヤーをしているように生き生きしていたこと



座談会の模様

に驚きました。片や、体育館型では、震災弱者同士で排除も生まれる。

これらの違いが生まれるのはシステムの問題で、社会が本当の力を生むためには、全面的な行政主導ではなく、行政を含め地域の自立を支援することが大事であり、それが社会の力量というものではないでしょうか。

〇言葉の貧困を超えて

生江 さきほど紹介した甲良町の実践からも、私たちはいくつもの示唆を得るはずはです。たとえば、社会に非暴力的領域を広げてゆくためには、なるべく法が介入しないことが大事だという点です。理性による統治ではなく、いいかえれば、実体的・固定的な善悪による統治ではなく、人々相互の関係的なあり方や

処し方に着目することです。

この実体的なモノの見方から関係的なモノの見方への移行は、私たちにとって重要な視点変更となるはずはです。物事を実体的に捉える視点は固定化を生み、ひいては敵/味方の区別を作り出す危険を潜ませるからです。クレポンによるハンチントン批判(『文明の衝突という欺瞞』新評論)も、この点を欺瞞と見抜いた。ハンチントンの「文明の衝突」論は、文明を実体視することで成立しているからです。私たちにとって大事なのは、言葉の貧困を超えて、人間にとってリアリティとは何かと問うことです。

本来のNGOの社会的役割についても、世の中のこうした実体化や固定化、カテゴリー化させる権力を突き崩すことにあると思います。すなわち、そのような「名付けの構造」を解体し、人が人と向き合うときに自然と動態化する間柄、そうした関係的なあり方を想起・再生させ、そこから発想してみせることが大事な役割ではないのか、と私は考えています。その意味で、NGOという名称にも何か実体が付随しているとは考えていません。

座談会を終えて

この座談会が持たれるか否か、じつは定かではなかった。あるNGO関係者からは、「対話する意味は?」「やるなら公開性を!」という疑問が出されていた。また私たち自身も、「NGO=実践」「人文ネットワーク=理論」という図式に縛られていた。だが、こちら側の予断は不毛であった。あらかじめ予測できる「出会いの生産性」ばかり考えることは、もうやめよう。生江氏に感謝したい。「人と人とが、ただ出会って、話す」という、シンプルな人間交流の豊かさを思い出させてくれたからだ。(出口)

観客の言葉

桑田禮彰(駒澤大学教員/哲学)

ひとつの社会は必ず分業によって成立しているが、民主社会を成り立たせる最も基本的な分業は、当事者(=行為者・俳優 acteur)と傍観者(=観客 spectateur)のそれであろう。民主社会は芝居小屋のような構造を持つのである。この社会においてまず何より先に「見世物 spectacle」として上演されるのは政治であり、そこで俳優=当事者とは代表としての政治家のこと、観客=傍観者とは被代表としての国民のことである。

「見る前に跳べ」という言葉があった。「傍観者であってはならない。当事者にならなければならない。自ら政治の舞台に上がらなければならない」というわけである。私にはこの言葉が戦後日本の浅薄な思想風土を象徴しているように思えてならない。この言葉は、民主社会の中で最も重要な役割を果たすべき傍観者=観客の本来の在り方の探究を頓挫させたから。

私たちは悪しき行動主義に煽られることを拒否し、あらためて正しい観客=傍観者の在り方を発見する必要がある。観客は、観察し思索するにしても、やはりそこにとどまってはならない。観客は、発言し、議論・論争を創り出していかなければならない。民主社会の力は、当事者=俳優の行動によってではなく、観客の言葉によって測られるのである。

「あなたはそれでは何をしていますか?」

大野英士(早稲田大学、埼玉大学他、教員/文学)

NGOに関わる人々の中には、政治が動くのを待っていたら間に合わない、手遅れにならないうちに自分達の手で、目に見える形で状況を変えなければならないという、強迫観念の持ち主が結構いるようだ。とりあえず現地を見て、現地から発想しなければならない。そして、現場を「知った」人間は「知らない」人間を批判できる特権的な位置を獲得する。かくして、多くの人間が戦争や災害で荒廃した地域へ向かって「善意」だけをもって旅立っていく。

現地についてのあやふやな知識と、片言の英語さえ知っていれば、そこに暮らす人々の「真意」を代弁するのに十分なのだろうか? 拙劣な侵略戦争の泥沼にのたうつブッシュのアメリカでさえ、大学クラスの研究機関に1万人を超える中東地域の言語・文化の専門家を新たに雇用しているというのに?

文化・文明を越境して「平和」や「平等」を実現するためには、相手の生活や文化を破壊すれば事足りる戦争以上に、「平和」「平等」を可能にする理論的地平を構築する「知」の営みが必要となろう。今のイラクを救うために、今日、一人の個人ができる最良の選択は、一冊のアラビア語の文法書を買って行くことかもしれない。そこから始める政治的発想がないならば、NGOは対峙するはずの悪しき政治に取り込まれてしまうだろう。

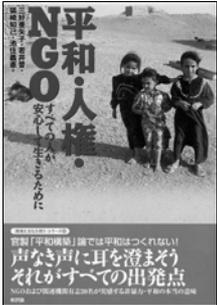
NGOのまなざし

『平和・人権・NGO』の伝えるもの
すべての人が安心して生きるために

寄稿

当書編者

狐崎知己



三好亜矢子・若井晋・狐崎知己・池住義憲編 新評論 3675円 NGO関係有志20名が唱える「平和づくり」の理論と実践。人々の声に耳を傾けることがすべての取り組みの出発点であると説く。

無着成恭の『山びこ学校』を社会開発論の視点から学生たちと読み返してみた。重度の貧困と栄養不良が蔓延し、借金苦と過労による保護者の病死、学校中退と一家離散という姿は、ふだんゼミで学ぶ途上国の厳しい暮らしと重なる。学生たちは、生活改善へ向けた政策をめぐって議論に没頭した。その後、佐野真一の労作『遠い「山びこ」』などを通して40年後の「山びこ村」と卒業生たちの実態を学ぶ。この間、高度成長と引き換えに、地域の生計を支えてきた生業の衰退、共同体の崩壊と過疎化、そしてなによりも『山びこ学校』の読者に感動をもたらした戦後民主主義への希望が見る影もなく消え去っていた。学生たちは、内発的な地域開発論の限界を思い知らされるとともに、戦後日本の一つのまなざしとそれを支える経験が失われたことを実感したようだ。

鶴見俊輔は『戦争が遺したもの』のなかで、「日付のある判断」を重視している。昭和22年の『山びこ学校』とその後の軌跡を当時の限界として批判するのではなく、自らをその時空間において、別の可能性や方向をもったテキスト及び実践と捉える。そこから、別の未来を構想してみる。そうすることで、失われたまなざしを自分たちなりに回復し、受け継ぐことができる。

「平和」、「人権」、「民主主義」が立派な「大文字」言葉として揶揄の対象になって久しい。NGOの存在意義がつねに別の可能性（オルタナティブ）を求め、示し、行動することにあるならば、そして誤った選択をする可能性を認識しているならば、平和や人権をそれぞれが拠って立つ小文字の経験（日付のある判断）にもう一度おきなおすことが有効だろう。政府や与党が大文字言葉を絶叫するいま、イラクやスーダン、グアテマラの被災民の失われたまなざしを辛うじて受け止めることのできる存在を、私たちは『平和・人権・NGO』に見出すことができるのだろうか。（こざき・ともみ 専修大学教員／中米のりひとと手をつなぐ会代表）

◆無着成恭『山びこ学校』（岩波文庫 '95 735円 初版51）／佐野真一『遠い「山びこ」』（文春文庫 '96 602円 初版92）／鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの』（新曜社 '04 2940円）

●上智大学他 教員／文学
白石嘉治

人文と人権

その肯定すべき貧しさをめぐって

フランス革命の『人権宣言』（1789年）は、文字通りには「人間と市民の権利の宣言」である。権利の範囲が「市民」のみならず、「人間」一般に拡大されている点に注意しよう。

「人間」の権利としての人権は、フランス人やイギリス人といった、豊かなイメージを喚起する現実の「市民」をいったん括弧に入れなければ見出されない。このいわば方法的な貧しさは、ルネサンスに遡る人文主義的な態度と同型である。人文主義者たちもまた、古典を字義通りに読む貧しさを選択した。そのことによって、神学的な解釈体系から離脱し、古代の作家を「人間」として取り戻すことができたのである。

この人文主義の貧しさは、いわゆる抽象ではない。既成の関心や枠組みを括弧に入れつつ、言葉に潜在する力を解きほぐしていく。そこで得られる読みは、むしろ感性にもとづく確信をとまなはずである。フランス革命の翌年には、カントの『判断力批判』が出版されていることを思い起こそう。そこに結実する18世紀の美学的な思考は、利害や因習にとらわれない共感の所在を追い求めている。それは人文主義と同様の括弧入れによって、「人間」そのものが立ち現れる感性の社会的な地平を切り開いたといつてよい。

今日、大学改革の名のもと、人文系の諸学の抹消が加速している。これは、経済原則による位階が強化されるなかで、人権が蔑ろにされている日常と無関係ではない。「改革」を推し進める石原都知事や中田横浜市長が恐れているのは、人文主義の貧しさにおいて、現実の利害とは無関係に「人間」が見出されることである。彼らが損なおうとしているのは、この「人間」とともに創り出される平等に対する感受性である。われわれとしては、静かに書物を読み解きつつ、「人間」に共振する地平を取り戻していくほかない。その肯定すべき貧しさの実践なしには、「人間」の艶かしさに遭遇することはないし、平等への確信によってのみ可能となる政治が始まることもないのだから。

人道主義・人間性・人文—Humanity を捉える本（選者 = 白石）



ピエール・ブルディユ著作集第2巻『寛容論集』（野沢協訳・解説 法政大学出版局 '79 15750円）17世紀後半のフランスでは、苛烈なプロテスタント弾圧が繰り返されていた。それに抗すべくブルディユは、彼自身の立場をこえて、「良心の自由」「宗教的寛容」といった普遍的な価値を練り上げていく。野沢氏の翻訳・解説とともに、われわれに人文主義的な批判の最良の実践を示している。



ジョルジョ・アガンベン『開かれし人間と動物』（岡田温司・多賀健太郎訳 平凡社 '04 2520円）「剥き出しの生」という極限から人間をとらえる。80年代以後隆盛した政治哲学の到達点だが、全般的な展望は以下が有益。三浦信孝編『来るべき民主主義—反グローバリズムの政治哲学』（藤原書店 '03 3990円）、宇野重規『政治哲学へ—現代フランスとの対話』（東京大学出版会 '04 3675円）



酒井隆史『暴力の哲学』（河出書房新社 '04 1575円）暴力は人道主義の観点から一概に否定されるべきものなのだろうか？むしろ暴力を排除しようとするモラルへの強固が、われわれを圧倒的な暴力の非対称性のなかに置き去りにしているのではないのか？暴力の種差を腑分けすることで、潜在的敵対関係を暴露し構築する直接行動としての暴力の可能性を開示する。



高橋哲哉・斎藤貴男『平和と平等をあきらめない』（晶文社 '04 1470円）新自由主義的な弱肉強食の社会観のもと、DNA鑑定にもとづく学級編成すら構想されている。だが、そうした事象は報道されないし、蔓延しているのは生活保守主義である。われわれは人間であり続けることができるのだろうか？今日の状況における必読の哲学者とジャーナリストが、政治を取り戻すために語り合う。

編集後記▶ここ数十年の間に、人文書の売れ行きは激減した。一方、NGO運動は、阪神・淡路大震災や9.11事件を経由して、日本でも大きな盛り上がりを見せている。NGO運動の高揚と人文書の不振、この一見無関係な二つの趨勢の中で何が生じているか、我々は見定めるべきだろう▶ふつつ、NGO運動と人文主義は、対極に位置するものと考えられている。NGO運動は行動主義を、人文主義は観照主義（非行動主義）を標榜すると理解されてきたからだ。そのため、両者は互いに相容れないものとして遠ざけ合い、対話を試みることさえ少なかった▶だが今日の情勢を省みたとき、行動主義や観照主義の平板な理解は、もはや不要である。例えば、今年4月から5月にかけて起こった「人質バッシング」という国内世論が、NGOを含めた市民運動系の人々を「プロ市民」と括り揶揄することで、彼らに対する違和感や嫌悪感を露骨に示したことは、記憶に新しい。NGO運動に対するこうした歪解と非寛容が生まれる背景には、明らかに人文主義の喪失が見られる▶NGO運動と人文主義は、そのいっかへほど遠くはない。「NGO／人文」「行動／観照」という従来の対立図式をいかに再定義するかが、私たちの課題ではないか。生江氏はもちろん、寄稿して頂いた狐崎氏にも感謝したい。（出口）